

村松友次郎編
池田俊朗
谷地快一

能世
三韻集
夏秋集

村松友次
池田俊朗
谷地快一
編

能
三
韻
集
夏
秋
集

古典文庫第四七七冊

昭和六十一年七月二十日印刷発行

非売品

編者

村松 友次
池田 俊朗
谷地 快一
たも ち

発行者 吉田 幸一

三部集・夏秋集

俳諧

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

俳諧三部集 天……………	五
俳諧三部集 地……………	二九
俳諧三部集 人……………	八九
夏秋集 上……………	一五三
夏秋集 下……………	二四三
『俳諧三部集』解説……………	三五三
『夏秋集』解説……………	三九五

「俳諧三部集」 凡 例

一、本書は、蕉下庵編『俳諧三部集』天・地・人の三部（宝暦十年跋）を底本（醉生書菴藏）として、翻刻した。

二、翻刻は、できる限り原文に忠実を旨としたが、印刷の都合上、大体次のようにした。

イ、漢字・仮名は、現行字体の活字に従った。片仮名も多用されているので、原文のままとした。

ロ、天巻の注釈文には、読点を施した。

ハ、地巻、人巻の丁移りは、表を「」とし、裏を「」で示し、丁付を洋数字で示した。

三、校正には、真下良祐氏の助力を得た。

池 村
田 松
俊 友
朗 次

諧 俳

三

部

集

天

蕉下庵発句抄

春 部

不二白し唯春たつと云はかり

金翠曰、是庚辰歳旦ノ句也、春タツトイフハカリニヤ三芳野ノ山モ霞テケサハ
ミユラシ、拾遺集第一忠岑の哥也、此哥ノ上ノ七文字ヲカヘテ俳句トナス、是
換骨ノ法ナリ

うくひすのしらぬけしきや月と梅

牧十曰、清少納言枕草帋ニウクヒスノコトヲイヘル段ニ、夜鳴ヌモイキタナキ
コトチス、今ハイカハセン、此言葉ニモトツキテイヒイタセリト見エタリ

嘘つきに聞ても梅ハ句ひかな

魚貫曰、此句俗語ヲイヒテ俗意ニアラス、梅ノ香ハ、今古無隔貴賤無差トイフ

コトライフナリ

宇治山といふも、鶯といふも、世のうき事に人はいふ也

うくひすもけによめる歌多からす

蘭明曰、古今集ノ序ニ、宇治山ノ喜撰ヨメル哥オホクキコヘネハトアリ、故ニ世ニ伝ル歌一首、我イホハ都ノタツミシカソスム世ヲウチ山ト人ハイフナリ、又鶯ニモ云伝ル哥一首、初ハルノアシタコトニハ来レトモ逢ハテソカヘルモトノ古巢ニ、カレコレヲカヨハシテイヘルナリ

飼れねは籠の苦もなし鳴蛙

心牛曰、此句、官袴ノ身ヲ愁ヒ語ル人ノ帰リテ後ノ吟也、古語ニ、受人之養而不死其難不義也、死其難是死無道之人豈義哉

大空に風そ命のいかのほり

玄美曰、莊子ニ冷然善也トイヘル語ニモトツク、猶有所待者也

闇なから梅の晦日そたのもしき

心水曰、梅ノ花ニホフ春ヘハクラフ山闇ニ越ユレトシルクソアリケル、又、香
ヤハカクル、トイヒ、香ヲタツネテソ、トヨメリ、此句ハ香トモ匂ヒトモイハ
テ梅ノ晦日ト云ナリ

初午や俗な神事もあな尊

敬和曰、初午ハ哥ノ題ニモ見エタリ、キサラキヤ今日初午ノシルシトテ稻荷ノ
山ニモトツハモナシ、依テ一句ニ俳諧ヲイフナリ

涅槃会や我往生もこゝろまで

機夕曰、霍林ノ昔ヲ爰ニウツシテネハン会トイフ、此日吾人モ暫ク死ヲ思フ心
アリ、霍林ハ釈迦如来入滅シ給ヒシ時、紗羅林ノ花ノ色白クナレリ、ヨツテ霍
林ト云フ

ねはん会や出と忘るゝ桃桜

守中曰、是世俗ノ心ノウツリヤスキライフナリ、前ノ句ヲ以此句意ハ解ナリ
をのか身を落てすくふ乙鳥哉

其匏曰、是ツハクラメノ自在ヲイフナリ、禮礼ニ曰、仲春月玄鳥至、又コノ燕ニツキテアハレナル本文アリ、爰ニセンナキ事ナカラ書載セ侍ル、南史ニ云、霸城王整之姉、嫁為衛敬瑜妻、歲十六、而敬瑜亡、父母舅姑咸欲嫁之、誓而不許、截耳置盤中、為誓乃止、所住戸有燕巢、常双來去、後忽孤飛、女感其偏栖、乃以縷繫脚為誌、後歲此燕果復更來、猶帶前縷、女為詩曰、昔年無偶去、今春猶獨歸、故人思既重、不忍復双飛
降ことハ忘れぬ霜の別れかな

黎明曰、世諺ニ、春三月ノ中、降霜ヲ八十八夜ノ別霜ト云、慥ナル本文ナシ、然トモ俳ニハ云也

しほならぬ海に蓋せよ志賀の花

風塵曰、是ハ予カ古硯ノフタニ句ヲコヒシニ筆ヲ取テ書レシ句ナリ、シホナラヌ海ハ近江ノ海ナリ、関屋ノ歌ニモ見エタリ

未
鹿はまた何こゝろなし雉子の声

一麿曰、鳥獸ツマコヒノ遅速ヲイフナリ、古歌ニ足曳ノ山ノタエマニ妻コフト
鹿ニモマサル声キコユナリ、是猿ヲカクシ題ニテヨメリ、モノニツ自然ト相似
タルナリ

七つなら花にことハれ山の寺

祇呂曰、山寺ノ春ノ夕暮キテ見レハ入相ノ鐘ニ花ソ散リケル、此哥ヲ句中ニ含
テ花ニコ、ロヲツケヨト言テ下意ニハ花ヲツヨク惜ム心ヲイヘルナリ、アル人
曰、此句山ノ鐘トイフヘキヲテラト置タル所、語路ノ味ヒアリトイヘリ

散花に心をのせていつこまで

柳雪曰、是杜子美カ句ニ寄レリ、一片花飛滅却春、風飄万点正愁人

夏 部

何ゆへに我を動かすほとゝきす

暁雨曰、此抄ニ載セン詩歌アケテカソヘ難シ、唯動ノ字ヲ眼目トス、又地藏十王經ニ曰ク、閻魔王宮ニ二ノ鳥アリ、一ツハ無常鳥ト云フ、コレ別遁都幾寿也、其鳴声ワカレノカレヨイクハクノイノチソト鳴也、則上ノ五字ヲ和ケタル也、此事イカト思フニ、古今集御抄ニ、ミクニノマチカ歌ノ注ニ、書載給ヘリ、又コノ都ノ文字ヲトノ仮名ニ用ヒタル事不審也、万葉ニハ此都ノ字ヲツトイフ仮名ニ用タリ、道ヲ好ム人尚可尋

初鯉この庖丁も十九年

玄美曰、莊子ニ、良庖歳更刀、割也、族庖月更刀、折也、今臣之刀十九年矣、所解数千牛矣、而刀刃若新発硎、コノ語ニヨレリ

あらそふな欲ハこほるゝ梅の升

心水曰、古語ニ斗斛ナツテ天下アラソフ、或人此句ヲ難テ曰、梅ノ升ニカキラス栗ノ升芋ノ升トフレルナリト云リ、是一句ノ風姿ヲ知ラス、句ノ体用ヲ弁ス人ノ言事也、先此句、栗芋ノ升ニテハ風姿ナシ、其上是ハ梅ヲ体ニイヘル句ニアラス、欲ヲ諫ル句也、故ニ梅ハ用ナレハ動キ欲ハ体ナレハ動ヌ也、コノ類和歌集ノ雜ノ部ノ歌ノ中ニアル也、ヨク／＼当合案

姫百合よ鬼とハ花の心から

黎明曰、此句姫トイヒ鬼トイヒ皆花ノ上ニイヒ立タレト、下意ハ人情ヲイヘルナリ

五月雨や洩ても月のぬるゝ顔

魚貫曰、月見ヌ月ト詠ルニツキテ、タマサカニ出ル月モ濡ルトイフナリ

一日ハ嫁を忘るゝ田植かな

蘭明曰、昔今ヨメ姑メノ中ノ勃磔セヌハマレナリ、是此句中ニ憎ノ字ヲ包タリつかれ鶉に月のなさけや後夜の鐘

敬和曰、鵲ニ月ヲ結ヘル句云フリタレト、是ハ倣模変様シテ新ニ語意ヲナス詩
ヲ有声画トイフモ此句ヲ見テ首肯スル也

燈火の花におほれる夏のむし

祇南曰、夏虫ノ身ヲ徒ニナスコトモ一ツ思ニヨレハナリケリ、又燈火ハ、西京
雜記ニ、樊將軍噲、問陸賈曰、自古人君皆云受命於天云、有瑞應豈有是乎、賈
応之曰、夫目瞶得酒食、燈火華得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小
既有徵、大亦宜然、故目瞶則呪之、火華則拜之、乾鵲噪則饒之、蜘蛛集則放之
闇の夜につゝみあまれる螢かな

既旦曰、源氏ニ夜ニツゝマレテトイヘル言葉ヲ一転シテ、包アマレルトイヘル
ナリ

魚三ツ四ツ蓮八九本いは五尺

金翠曰、蓮八九本ハ白氏文集、イホ五尺ハ西上人ノ歌ニアリ

短夜やせめて蓮の朝ほらけ